

高等学校美術科課程における メディアコンテンツ鑑賞授業の実践例

栗山 紀^{†1}

一般的な高校生の多くが、自分を“制作者”ではなく、“鑑賞者”として自覚している。
そのため、まず、観察力、鑑賞力＝観てわかる力をつけさせたいと考え、教育方法を考えた。
メディアコンテンツに対する“目利き”を育てることを目的とした授業実践例を紹介する。

1. はじめに

筆者が現在赴任している東京都立世田谷泉高等学校は、様々な事情（小学校・中学校での不登校経験等）を抱えた生徒達に社会経験を積んでもらうことを大きな目的とした定時制高校です。このような高校をチャレンジスクールといい、東京都に現在5校設置されています。

しかし通学そのものが不得意である生徒も多いため、そのような生徒でも“やってみたい”と思えるような授業を工夫しています。そのため、美術系の高校ほどではありませんが、様々な創作表現系列の学校設定科目が開講されています。

筆者は赴任して5年目になりますが、これまで個々に非常に複雑な気持ちを抱えている本校の生徒達に対し、美術教育を通じて社会に再チャレンジしていくための自信と技術を育むことをテーマに授業作りを行ってきました。

しかしなかなか思うようには授業の成果が上がらず、悩んでいたところ、2012年8月末にCG-ART協会が4日間に渡り開催した教育者向けセミナーを受講し、そこで“鑑賞者としての力をつけさせる”という考え方を知りました。

なかでも、金子満先生（東京工科大学大学院教授、徳稲マスターズアカデミー教授）の講義に目から鱗が落ちる思いがしました。それは、“生徒達のほとんどは、卒業して“制作者”になるのではなく、“鑑賞者”になる”ということ、そして更に“それならば鑑賞者としてのものの良し悪しがかかる“目利き”に育ててあげれば良い”というお話でした。

そのことをきっかけに、授業のめあてを“制作すること、手を動かすこと”から“よく観察すること、見たことを理解すること”に変更して様々な授業実践をはじめました。

筆者はこれまで、授業づくりの指針として、生徒達に“良い作品”を作らせることを目標にしてきました。ここで言う“良い作品”とは、それを制作した生徒本人が“なかなか良く出来た”と認めるような作品を指します。つまり、

生徒自身が納得行くような出来栄の作品を制作する過程や、また良い作品を完成させる達成感から生徒の自信を引き出し、自己肯定感につなげたいと考えていたのです。

ところが、この指針には大きな見落としがありました。そもそも前提として生徒自身が“私にも出来そうだ”と考えていないことは、教員が力を貸して達成させたとしても、生徒にとって“出来た”という実感にはつながりにくく、従って生徒の自信を育むことにならないということです。

筆者は自己の経験から、「良い作品を作ることが出来た」という経験や達成感が、自信や自己肯定感につながると考えていました。しかし、それは筆者個人が物を作ることや絵を描くことがそもそも好きな性分で「自分は頑張れば良い作品を作ることが出来るだろう」という認識を持っていたからこそそのことでした。「良い作品を制作すること」が単純に自己実現につながるという考えは非常に個人的な根拠によるものだったということに気がつきました。

金子先生のお話を受けて、あらためて生徒の作品制作に対する態度や言動を観察した結果、生徒達のほとんどは“自分は良い作品を作ることが出来る”というふうには考えていないという感触を受けました。“自分は良い制作者になれる”と考えることが出来る生徒も、もちろんクラスにいくらか含まれていますが、そういった生徒は全体に対しかなり少数であるように思います。

しかし、鑑賞を中心とした授業を行った結果、“自分は良い鑑賞者になれる”ということであればほとんどの生徒が同意を示すということもわかりました。これは非常に大きな発見でした。

本校においては、一般的な絵画技術の前に、生徒の自信や自己肯定感を伸ばすことが必要であり、そのためには制作者としての技術指導よりも、鑑賞者としての成長を促すことがより効果的ではないかと私は考えています。

以上のような観点から計画実践した授業内容を以下に紹介したいと思います。

^{†1} 東京都立世田谷泉高等学校 美術科教諭

2. 鑑賞を中心とした授業

(1) 映画“マトリックス”のマシンガン撮影実習

東京都立世田谷泉高等学校 学校設定科目“鑑賞と表現”授業内において、以下の内容で授業を行いました。

科目：創作表現系列“鑑賞と表現”

年間指導目標：

様々な作品（主に映像作品）を鑑賞しその制作プロセスを実践することにより、プロフェッショナル(制作者)の視点を知り、能動的な作品鑑賞の視点を身につける。

課題名：

映画“マトリックス”のマシンガン撮影の実践

課題内容：

①デジタルカメラ 10 台を半円形に並べ、カメラ 1 台につき生徒 1 名を配置する。モデルとなる生徒がジャンプした瞬間などを狙い、同時にシャッターを切る。

②①で撮影した画像をつないだものを鑑賞する。

③映画“マトリックス”のマシンガン撮影を用いたシーンを鑑賞し、①の映像と比較しディスカッションする。

④2つの映像の違いをプリントにまとめ、ディスカッションする。

指導目標：

生徒達自身が制作した映像と、実際に公開されている映画の映像を比較することで、プロフェッショナルの映像表現を身近に、かつ実践的具体的に学ぶ。



映画“マトリックス”のマシンガン撮影の実践では、“同じ映像効果を狙った”映像制作を実際に行うことにより、生徒作品をプロフェッショナルの優れた作品と同じ延長線上に乗せたということが大きなポイントです。

自分達の作品に対し改善に改善を重ねたものが、あの有名な映画のワンシーンであるという観点に生徒を立たせたいと考えました。

そのことにより、プロフェッショナルの作品と自分達の作品との違いを具体的に捉えさせ、かつまた、非常に遠い目標ではあっても、工夫を重ねることで自分達にも到達可能な映像であると感じさせたかったのです。

筆者は今まで、鑑賞の授業と言えば、制作課題に応じプロフェッショナルの絵画や彫刻、映像等の作品例を挙げ“参考にしよう”という形で生徒達に提示してきました。

言い換えてみれば、すべて作品制作のための鑑賞という位置づけでした。

しかし今後はそうではなく、作品のどこがどのように優れているのか、どのような工程、工夫、技術を経てそのような作品が生まれるのか、具体的に生徒に考えさせることを含めて鑑賞の授業を作りたいと考えています。

つまり、「鑑賞のための作品制作」という位置づけで授業を工夫して行きたいと思っています。

(2) “観察力”を身につける素描指導—①

学校設定科目“素描”授業内において、以下の内容で授業を行いました。この授業内容は中村泰清先生（デジタルハリウッド大学準教授・東京工業大学世界文明センター非常勤講師）が考案され、公開されている指導法です。

科目：創作表現系列“素描”

年間指導目標：

年間通じて様々なモチーフの素描に取り組み、絵画制作の基礎技術を身につける。

課題名：

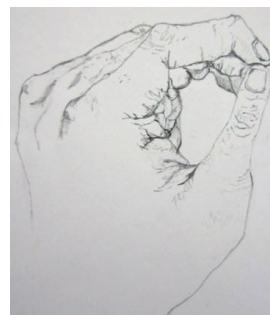
“手を描く”観察力を身につけるトレーニング①

課題内容：

- ・ 60 分間で手を描く。
- ・ “手”や“指”という言葉でモチーフをとらえるのではなく、初めて目にするもののようにしっかりと観察することを目標に細部まで良く観て描く。
- ・ モチーフを片目で見える。
- ・ 1本の線で表現し、間違った線は消しゴムで完全に消す。

指導目標：

しっかりとした“観察力”を身につけることを長期目標に、導入として“観察する”とは具体的にどういうことであるか実習を通じて学ぶ。



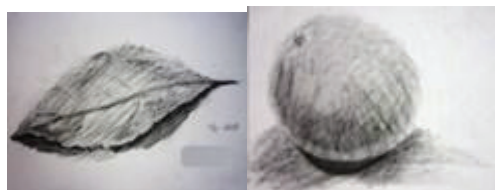
生徒作品例

“手を描く”観察力を身につけるトレーニング①は、CGアート協会の主催した3DCGの教育者向けワークショップ（2012年8月21～8月24）において、中村泰清先生より実践講義をいただいた内容をそのまま授業に活用したものです。

デッサンに必要な技術や知識の指導の要素—遠近法を始めとして、形を測る方法、色の明暗の付け方や表面のテクスチャの描き分け等々、そのような数々の要素を一旦保留し、指導目標を“観察力”だけに絞り込んでいます。

筆者はこれまで、“よく観て描きなさい”という指示を何度と無く繰り返してきましたが、“良く観る”とは具体的にどういう見方を指すのかという大切な説明を十分にすることがなかったように思います。また、どういった指示を与えれば生徒は“良く観る”事が出来るのか、そのことについても深い考えを持っておらず非常に反省をしました。

以下に、同じ生徒の“観察”を目的とした指導法以前、以後の作品を比較し掲載しました。この作品を描いた生徒は授業の課題でなければ自発的に絵を描くということがほとんど無いタイプの生徒ですが、指導方法の違いでこれだけ作品の内容が変化するという事に注目していただきたいと思います。



指導前



指導後

(3) “観察力”を身につける素描指導—②

学校設定科目“素描”授業内において、以下の内容で授業を行いました。この授業内容は中村泰清先生が考案され、公開されている指導法をもとに工夫を加えたものです。

科目：創作表現系列”素描”

年間指導目標：前述のため省略

課題名：

“手を描く②”観察力を身につけるトレーニング②

課題内容：

- ・ 60分間で手を描く。
- ・ 黒い画用紙に白鉛筆で描く。
- ・ 1人1台スポットライト光源を用い、モチーフである手を任意の角度で照らすこと。
- ・ 光が当たって形が見えるところだけを描き、暗く沈んでいて見えないところは徹底的に描かずにおくこと。

指導目標：

描画力の基礎である、しっかりとした“観察力”を身につけることを長期目標に、導入その②として“観察する”とはどういうことであるか、実習を通じて学ぶ。



生徒作品例

“手を描く②”観察力を身につけるトレーニング②では、しっかりと観察するための環境を整えたことがポイントです。

中村先生の講義に拠ると、“観察”による描画は、視覚上現実に生徒の目に見えている光景（モチーフ）と、デッサンの一般的な立体表現方法との矛盾を浮き彫りにすることになるということでした。

そのような矛盾の1つに、窓や蛍光灯が複数あるような多重光源の環境下では、せっかく丁寧に見たままにデッサンしたとしても、立体感の表現としては逆に弱くなってしまふといったことがあります。

例えば、過去、素描の授業内で立方体のデッサンを行った際に、生徒よりこのような質問を受けることがありました。

“先生は明るい、中間、暗いに分けて立方体の面を描き分けるように指示されますが、私には、とても3つの暗さに分かれているようには見えません。

立方体の上面は確かに明るいけれど、側面は2面とも同じ暗さに見えます。”

このような質問を受けた場合、筆者はこれまで“立方体の側面のどちらか一方をより暗いと決めて、描き分けるようにしなさい”という指導をしてきました。

それは“しっかりと明暗を描き分けることによって立体感のあるデッサンになる”というテクニックを指導しようとしてのことでしたが、モチーフの明暗のコントラストを画面上でコントロールさせるということは、しっかりと見たままに描きなさいという指示とは明らかに矛盾します。

このように一般的な立体表現方法指導の方向性と、観察し、観たままを描くという指導には矛盾する側面が多々あります。

また一般的な学校設備の環境が多重光源であるため、このような事態、つまり“見たままに描いても立体感を感じさせるデッサンにならない”ということは往々にして起こります。

そこで、指導する側は、“生徒の視覚や実際に感じたこと”を優先するのか、“技術の習得を優先するか”を明確に選択する必要があります。

そして現状において筆者は、立体感を表すために明暗をどう扱うか、といった技術指導よりも、生徒が実際に見て感じ取ったことを肯定したいと考えています。

この観察力を伸ばすという指導においては、生徒の見たもの、実際に感じ取ったものを矯正することなく授業を進めることが非常に重要だからです。

その上で、立体感を感じる絵になるようにするには、これは環境を整えるしかありません。

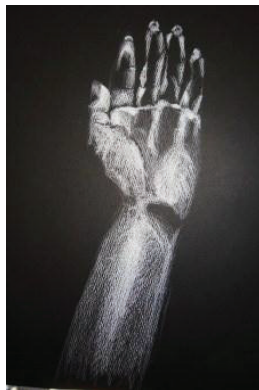
そこで前述のように単一光源に近い環境を作って実習を行いました。

以下に、複数光源環境での実習例と単一光源環境での実習例を比較し掲載しました。

環境が整っていること、また“観察する”というシンプルな目標のために生徒達も迷い無く描画をすることが出来て居るように思います。



複数光源環境下のデッサン



単一光源下のデッサン

(4) “観察力”を身につける素描指導—③

学校設定科目“素描”授業内において、以下の内容で授業を行いました。この授業内容は中村泰清先生が考案され、公開されている指導法をもとに工夫を加えたものです。

科目：創作表現系列”素描”

素描年間計画：前述のため省略

課題名：

石膏デッサンのための観察練習

課題内容：

準備

画面を8分割するガイド線が入った下敷きとデスケルを用いて、モチーフである石膏像のシルエットを描く。

制作

直径1cm長さ10cm程度の細い紙筒を用意する。

紙筒を片目で覗き、モチーフである石膏像をトリミングして見る。このときの視野の範囲を5分間よく観察して描く。5分経過したらコンテの色を変え、また紙筒を覗き、次に描く石膏像の部分を決めて同じように5分間よく観察して描く。これを繰り返すことにより、部分観察の積み重ねによる全体の描画を行う。

指導目標

“言葉でとらえない”ということをより深く理解する。全体を見渡せば“髪”や“顔”と言葉でとらえがちな各部分について、紙筒を使用して観察範囲を限定する事で見て

居るものが何かわからないという状態を作り、そこからの観察を体験する。

普段視覚を使う際、私達は目に映るものを無意識に言語化し、安全とわかる物からどんどん意識の外へ分類してしまっています。ですから一口に“観察する”と言っても、一旦言語化され“それ以上見る必要ない”として意識から締め出したものを描画のために再び取り上げ、吟味することは、実は非常に難しいことだと思います。

また本校の生徒達はマンガやアニメといったすでにデフォルメされた造形に非常に深く親しんでいるケースが多く、そういった文化的素養のある生徒は見えたものを言語化したうえで更にその記号を描画するという習慣を持っています。このような習慣を持った生徒達は、特に人物の表現について“こう描けばそれに見える”という記号のパーツを多く持っています。例えば石膏像のある部分を見て“髪”だと言葉でとらえてしまったら、“こう描いておけば髪に見える”という記号 - 平行に何本かの線を引く、といったような描き方をしがちです。ですから人物や石膏像を描画させる際には、生徒達が観察からではなくそのような記号で画面を埋めようとしてしまうことを避ける工夫が必要だと考えこの方法を実践しました。

また5分間狙った所を描いた後、コンテの色を変えるように指示しました。それはこちらの指示通りに部分を観察することが出来ているかどうかを調べる手立てとして導入しました。

以下に示す作例は、観察による描画を実践している生徒の例（作例1）と、モチーフを言葉でとらえてしまっている生徒の作品（作例2）です。

作例1では、紙筒を覗いて見えた範囲でコンテの色が変わっていることがわかります。こちらは、課題の意図通りの良い作例です。

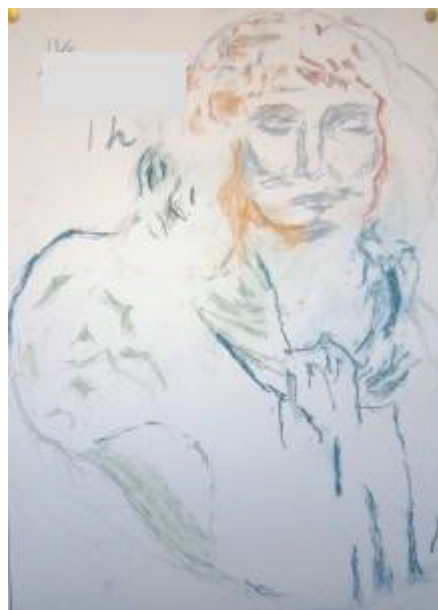
作例2では、コンテの色は帽子、髪、顔、体など、生徒自身が言葉で区切った箇所が変わってしまっていることに注目していただきたいと思います。

観察を主眼に置いた指導方法を実践した際、普段からイラストや絵を描くことが好きな生徒ほど、頭の中で言語化し、記号化したものをそのまま描いてしまい、モチーフを観察することは苦手であるということがわかりました。

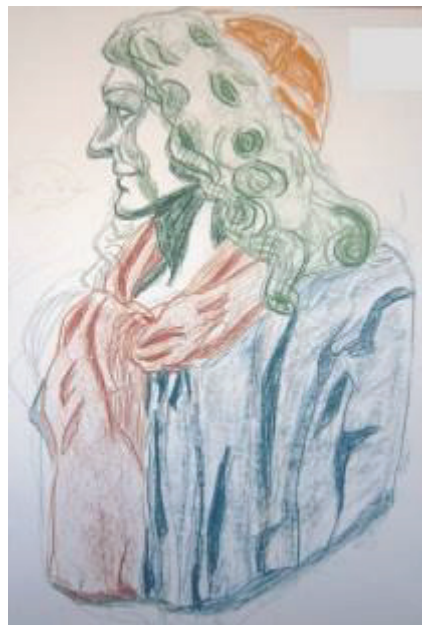
そしてそのような生徒には、言葉でとらえて描くことが実際にはどういうことなのかを伝えることはとても難しいと感じました。そのような生徒は、自分の中に“上手な絵”というもののビジョンがあり、その“上手な絵”を描きた

いと考えているからです。そのため、目の前にあるものを観察するのではなく、自分のなかのビジョン、“上手な絵”のイメージを追うことになってしまいます。

そういった生徒に対し、言葉でとらえてしまっているということはどういうことか、なぜ観察するほうがより良い絵が描けるのか、納得してもらうためにこの方法を考えました。



作例 1



作例 2

(5) “観察力”を身につける素描指導—④

中村泰清先生より“観察する”デッサンの基礎力指導についてご教授いただき、非常に感銘を受けて、是非、自分の担当する高校生へ向けた授業を制作しようと考えたのですが、1つだけ不安に思う点がありました。

筆者の担当する高校生たちは、とすると集中力が続きにくく、デッサンの授業では少し描くと飽きてしまいがちです。そのような生徒達が果たして中村先生にご指導いただいたように、5mm線を描いては観察し、また5mm描いては観察するといったような、手間と集中力の必要な作業を出来るだろうかと心配でした。

そこで、実際に授業を展開する前に、小学校3年生の筆者の甥に、夏休みの宿題を手伝うという名目でこの“観察によるデッサン”の授業を受けてもらうことにしました。その結果完成した作品を以下に掲載します。



線画



完成図

この作品は、完成まで4時間半かかりました。最初描き方を説明した際には、甥も出来るのかどうか半信半疑でしたが、描き進むうち真剣に画面に取り組み、集中力を深めて行きました。

中村先生の指導では、モチーフを言葉でとらえないかわ

りにオノマトペで捉えると良いというアドバイスがありました。そこで甥にもそのことを伝え、表面（テクスチャ）の感じはどういった“音”の感じがするか、ディスカッションをするなどして描画を進めました。たとえばビニールの表面は、チュルツヤテレエンとしている、バッグの持ち手の布の部分はボツボツガシゴシ、などなど、子供の伸びやかな感性でとらえた“感じ”が様々なオノマトペとして飛び出し、非常に面白く感じました。

また、そうすると、集中した際、そのようなオノマトペを口の中でつぶやきながら描くという様子が見られ、それにより観察した生の感覚が描画に反映されていくように感じました。

この様子を見て、これは高校生へ向けた授業もきっと成功するだろうと確信を持ちました。そして実際に、高校生たちにとっても非常に有意義な内容の授業となっているように思います。

これは、集中することの喜びや、一度に少しずつしか進まないけれど、着実に、正解と確信できることをやる、その充実感が、観察することの面倒くささや、疲れよりも、圧倒的に勝るということだと思います。

筆者はそういったことこそ、ものの作りの喜びの核ではないかと思うのですが、この“観察して描く”という指導はそのような核にあたる経験を与えることが出来るように思います。

(6) おわりに

以上のように、筆者は「観察」「鑑賞」をキーワードとした美術の授業には大きな可能性があるように思います。

本校の生徒たちは、入学までに少なからず挫折を経験している場合が多く、一般の高校生たちよりも自己肯定感が乏しいように感じています。そういった生徒達に、少しでも社会に出ていく力や自信をつけてもらうために、今後も授業内容を工夫していきたいと思います。

謝辞

本研究報告にご協力頂いた皆様に、謹んで感謝の意を表します。